

◆適応フォーラム 2012 報告◆

最近の地球環境研究においては、気候変動に対する適応策が大事なキーワードの一つであることはご承知の通りです。ただ、その中で、従来の防災・減災と災害適応策の関係性はどうかという疑問が解けないままでした。このことは、IPCC など国際的舞台上でも議論の対象であるとも聞いていました。また、科学的・技術的な研究から得られた新しい知見を地球環境政策にどう反映するか、も大事な課題です。

そこで、三村機関長とも相談して、“適応政策・適応技術に関するフォーラム 2012”と銘打って、主として、防災・減災分野と気候変動適応分野のそれぞれに関わりのある研究者・技術者・行政担当者の方々を中心にパネリスト・コメンテーターとして声をおかけしましたところ、多くの方々の賛同を得るとともに、当日は、多数の一般参加者を得ることもできました。



午前中は、東京理科大学龍岡文夫教授と茨城大学三村信男教授のキーノート・スピーチを皮切りに、午後は2つの分野の相互理解を深めるためのセッションを設定しました。

初めての試みでしたので、“パネリストとコメンテーターの議論がかみ合っていなかった”とか“政策担当者はなかなか発言しにくい面があり、引き気味になったのでは？”などのご意見がありました。が、総じて、“次を期待したい”という雰囲気でしたので、次は達成目標を見極めて企画を改めたいと思っています。



最後に、旅費も謝金も宿泊費も出さないという、極めて礼を失したご依頼にもかかわらず、前向きに取り組んでいただきフォーラムを成功裏に導いてくださったキーノート・スピーカー、パネリストとコメンテーターの皆様がこの場をお借りして心からお礼を申し上げます。(執筆者：安原一哉)

◆東北における震災調査◆

コミュニティの結びつきが震災からの避難や復興に役立ったのではないか、という仮定のもとに5月21日にフランクと一路東北に向かった。対象として宮古市と陸前高田市の牡蠣養殖を行う漁港を選んだ。結果としてどちらのコミュニティも結びつきが強かったため、2つのケースで明確な差異がなく、被害や復興との明確な関係は見いだせなかった。いずれの地域も年中行事が多く、陸前高田市では年間を通じて土日は何かしらの行事があったという。

震災の死亡者数および行方不明者数は宮古市で527人(人口の0.89%)、陸前高田市は1795人(人口の7.7%)におよんだ。この差は津波が陸に入り込んだ程度によるところが大きい。空中写真を判読してみると陸前高田の街はかなり広範囲にわたり波に飲まれていることがわかる。

牡蠣養殖の復興はいかに。どちらも残った資材の活用と創意工夫で1年目を乗り切っていた。宮古では牡蠣の養殖が多少の海面の上下では流れないように末端を海底に重しではなく強力な杭で打ち込んでいた\*。また、陸前高田では震災前にはやや混雑していた牡蠣筏を間引いて牡蠣の質の向上を図っている。

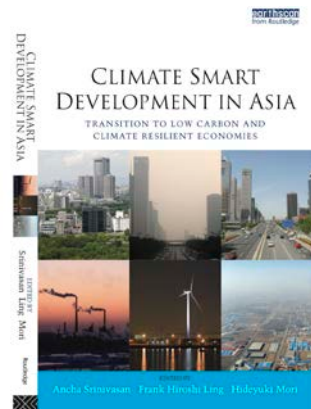
これらの地域を継続して観察し、かつ茨城県の沿岸域との比較を行うことで、震災時の迅速な避難に必要なヒント、および復興について継続して考えていきたい。(執筆者：田林 雄)

\*震災前からの試みであるが、さらにこの作業を推進していた。

◆書籍紹介◆

2008年から2012年にかけて『アジアにおける気候変動に適應した発展: 低炭素および気候変動に対する抵抗力の高い経済への移行(Climature Smart Development in Asia: Transition to a Low Carbon, Climate Resilient Economy)』の執筆と編集を行い、この3月に上梓しました。本書は、「気候変動に適應した発展に関する主要な課題」や「アジアにおいて低炭素社会や気候変動に対する抵抗力の高い経済に移行するための市場と技術に根ざした施策」を網羅しています。具体的には、エネルギー・輸送・土地利用・建設分野における温室効果ガスの削減の事例をアジアの複数の国において戦略・政治・インセンティブといった観点から分析しています。また、現在から将来にかけての気候変動に対する抵抗力を高めるために必要な策についても検討しています。本書が、国連が主催する持続的発展を検討する国際会議「リオ+20」のテーマである「持続的発展や貧困の根絶に資するグリーン・エコノミー(green economy in the context of sustainable development and poverty eradication)」といった課題やその先にある課題の解決に少しでも貢献するものであれば編者としてこれに勝る喜びはありません。

(執筆者：Frank・Ling)



◆島田コーディネーターのちょこっとコラム◆  
～本の紹介～ 『未来への翼～までの力～』

先日、生まれてはじめて amazon に本のレビューを書きました。今回はその本の紹介です。皆さんは、全村避難が決定された昨年夏の福島県飯館村の当時のニュースを覚えているでしょうか？私は、当時のテレビのニュースで、飯館村では、役場撤退の最後の議会で、飯館村の中学生 20 人をドイツに派遣する事業を実施するというお話を耳にして、飯館村の大人たちはこういう決断をしたんだと、強く印象に残っていました。当時のニュースにはこうあります。「飯館村『未来への翼』プロジェクト」と銘打ち、南西部の環境首都フライブルクの民家に宿泊しながら、バイオガス発電発熱やグリーンツーリズムなどを視察する。旅費や滞在費は全村が負担する (asahi.com 2011.6.21)。折に触れ、このことは我が家で家庭の話題となっていました、facebook を通して、その報告書が本になったという情報を見つけ、迷わずその本を取り寄せました。

この本を読んでみて、飯館村の人たちが、どうして、この非常時に村の子供達を家族から離れた遠いドイツに送り出したのか、その謎がわかりました。飯館村の村営書店「ほんの森いいたて」の副店長高橋みほりさんが編集された手作りの報告書ですが、とても思いのこもった 1 冊です。

ICAS 事務所にも「未来への翼」「までの力」、2 冊を置いておきましたので興味をお持ちの方は ICAS にお越しの折にお声掛け下さい。  
(執筆者：島田 敏)



◆研究室紹介◆

今回は、人文学部で社会心理学を担当されている伊藤哲司先生の研究室（通称、茶話会）を訪問しました。

<研究室の構成を教えてください>

今年度は大学院生 6 名、学部生 4 名、大学院生を目指す学部研究生が 6 名です。うち留学生が 10 名、社会人学生 2 名と多様な学生の集まる場となっています（写真は、円卓を囲んで行われている茶話会の様子）。



<どのような研究&活動が行われていますか>

研究・活動に共通していることは、人間と社会の相互作用を、観察するだけでなくフィールドに自ら関わることによって学んでいくことです。震災の被災で生れたコミュニティとの協働など、地域のネットワークにも積極的に入っていきます。

<多種多様なテーマ&活動ですね>

それがこの茶話会の特徴です。他者と出会うことで自らも“気づき”を得ることができます。「多様性のなかの対話」から生み出される“知”を大切にしていきたいと思います。(執筆者：安島清武)

2012 年度 ICAS カレンダー

4 月	H24 年度サステナプログラム履修登録開始	10 月	第二回 ICAS 運営委員会
5 月	5/11 2012 適応フォーラム 5/16 第一回 ICAS 運営委員会 5/23 国際国内演習ガイダンス 5/25、26 SSC 研究集会 5/29～31 Adaptation Futures (ツーソン、アリゾナ)	11 月	11/14、15 S-8 シンポジウム (法政大学)
6 月	6/9、16、23 サステイナビリティ学入門	12 月	茨城県三者連携講演会 (農) 地域サステナウインターコース (インドネシア学生来日)
7 月	7/3 茨城自然エネルギーネットワーク第 4 回セミナー 7/14～16 サステナ最前線講義	H25 年 1 月	第三回 ICAS 運営委員会
8 月	APN アジア太平洋適応支援	2 月	
9 月	9/3～11 国際実践教育演習 (ブーケット) 9/15～23 インドネシア演習 9/26～28 国内実践教育演習 (霞ヶ浦) ICAS 年報発行	3 月	ICAS 研究報告会 学生サステナフォーラム

※網掛けは ICAS が主催する企画です。ICAS の予定に関するお問い合わせは ICAS 本部まで [icas@mx.ibaraki.ac.jp](mailto:icas@mx.ibaraki.ac.jp)